



松本 健一

この十数年の、あまりにも急激な社会的変動は、それまでの社会にあつて実体的な意味をもつていた言葉を、死語にちかい位置においやつた。たとえば、「地方」「農村」「民俗」「大地」などである。

「転向」といった言葉も意味を失いはじめた。その結果「平和」とか「革命」とか「理想」といった抽象的な言葉が、わたしたちの心のなかに激しい衝動力を生みださなくなつてきた。それらを口にするのが白々しく感られてきたのである。

現実主義の危険

むろん、これらの実体的な言葉のうえに成り立っていた関係概念や思想的な概念、つまり「共同体」とか「帰郷」とかが、それは下手をすると、卑俗になる。状況につきすぎて、それに流されてしまつ危険性もつからた。

「自民党はどこへ行くか」という特集を組んでいる「世界」や、「時代の先端を行く発想の秘訣(ひけつ)」という特集を組んでいる「潮」に、その現実主義の弊害は強くあらわれているような気がする。これなら、状況の奇怪さ、風俗の新しさや面白がつてフォロウする週刊誌ジャーナリズムのほうが、自身が面白がつていることを知っているぶんだけ抑制がきいてい

ニヒリズムの醸成に

「変わりうる」の視点欠く

い、戦争がいま起つていっているという現実をはつきりつかん、そのなかで日本の戦争のあり方をもつと少し良くすると、かす方向をもつと少し良くすると、かす以外にないやないか」という議論だつた、といつたのである。これは、こんにち流行の趣味をみせる現実主義に対する歴史からの教訓といつてよ

より今日的な批判
こつた現実主義批判が、古在のはあ、あまりにも歴史からの教訓といつた原則的な方針

古在由重氏
古在由重氏は、日本国がなくなつたとき、直ちに、人間、という概念が残る」といふふうに考える。江藤の発言は、われわれは「人間」といふ抽象的な存在である。中嶋自身に、いま毛沢東とは、を、編輯として書

中嶋嶺雄氏
中嶋嶺雄の毛沢東評価、ひいてはそつた毛沢東を生み、そつて捨てた現代の中国に対する評価が必ずしも浮上してこ

古井喜実氏
古井喜実氏は「中央公論」で、憤慨している。古井の「経済の手段になり下がつた政治は、目を算ますべく、算まざるべき時ではないか」といふ結論は、こつ真つ当なものであるが、それゆえに真つ当なことが行われていない日本の政治の現実を逆証している。この文章は、現実

法論に傾いているのに対して、吉本隆明のそれは、江藤淳というオビニオン・リーダーを相手にしたが、それらは究極において「戦争はもう好むと好まざるにかかわらず起こざるを得なかつたのだから、これに単に反対したつて仕方がないや

喪失するものだ。つまり思想家としては非本質的な「二番手」の仕事なんじゃないか、というのである。これに対して、江藤は「本質的」なことをいうため

中国評価、浮上せず
こつた現実主義の傾向は、中嶋嶺雄の「日本の知識人」とつて、いま毛沢東とは「(正論)」といつてくられて実証的な研究についても感じざる満である。たしかに、この論文を

よつて現実の容認になりやすい点であらう。いま目のまえにある事態を、絶対的な現実、とみなすことによつて、そのもつとのニヒリズムを醸成し、生きかたの世界をせめてしまつて



古在由重氏



中嶋嶺雄氏



古井喜実氏

(評論家)